

関西大学リビングラボによる共創カフェの取組

①環境保全・資源再生 ⑩社会基盤分野

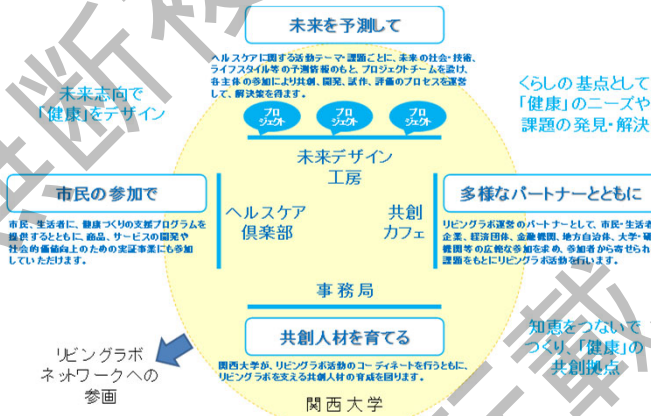
北詰恵一*1、宮脇和夫*2、岡村雄介*3、郭敏娜*4、久保田圭悟*5

(*1環境都市工学部 都市システム工学科 教授) (*2関西大学 健康まちづくりプロジェクトマネージャー)

(*3院生) (*4先端科学技術推進機構 PD) (*5学部生)

研究概要・成果

関西大学リビングラボの全体像



【リビングラボのテーマ】

健康と環境の好循環

【ステークホルダーの役割・メリット】

生活者・市民：自らや家族の健康づくりが積極的に行われ、活動を通じて社会貢献を実感・共感する機会となる

企業：ヘルスケアに対する潜在的ニーズを発見し、新商品・サービス開発の効率化を図るとともに、健康増進・予防ビジネス創出の気運が高まる

参加を通じて社員の共創人材としての育成ができる

地方自治体：健やかな未来を見据えた新たな地域課題の発見と解決に向けた取組みが進められ、地方自治体の新たな政策づくりとブランドの形成に寄与する

大学研究機関：先導的役割を果たすことで、オープンイノベーションによる産学官民連携の成果を得る

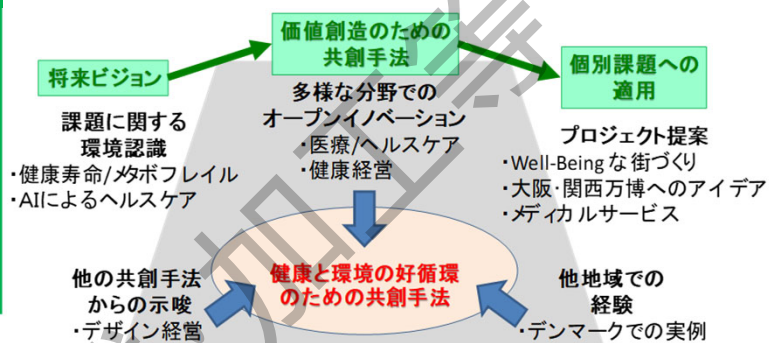
【共創カフェのマネジメント】

- 参加者の関心を交えながら、社会的価値創造に力点を置き、将来ビジョン→共創手法の開発→個別課題への展開というプロセス(価値の流れ)に沿って進めた
- オープンイノベーションによって知恵を集めるため分野のオープン性、取組手法のオープン性、地域のオープン性に配慮した
- イノベーションが必要なテーマを持つ主体にとって、共創カフェが、インフラとしてのリビングラボのわかりやすい入口になることをめざした

成果

- 利用者自身も明確には理解していない潜在ニーズにこそ新技術・政策のヒントがあり、開発の上流段階から利用者に参画してもらってフィードバックするプロセスがイノベーションに繋がる
 - 異なる狙いや考え方をもった主体が集まるからこそイノベティブな成果が期待できるが、ビジョンを共有しなければソリューションに至らないことから、それらを調和させるオーケストレーションが求められる。その際には、各プロセス上の価値の創造に至る流れを明確に理解する必要がある
 - リビングラボをインフラとして考えるべきであり、イノベーションが必要なテーマが発生したときに、リビングラボの機能や仕組みを活かして、多くの主体がアプローチできる基盤の構築が必要である
- ※ 本研究は、「関西大学リビングラボプロジェクトユニット」の研究成果の一部である

共創カフェの実施



応用分野、実用化可能分野

※ 「環境と健康の好循環」というテーマに合致し、オープンイノベーションによる利用者ニーズを反映した新しい技術開発(企業)、市民の参画による政策立案(自治体)、リビングラボ活動を実施するグループとのネットワーク

問合せ先: 関西大学 環境都市工学部 北詰恵一 E-mail: kitazume@kansai-u.ac.jp

関大ORDIST

先端科学技術推進機構

社会連携部 産学官連携センター、知財センター、イノベーション創生センター